［巻頭インタビュー］

私のドラマの中心に食卓があるわけ

石井ふく子

50年以上もの間、テレビプロデューサーとして第一線でドラマ作りに携わってきた石井ふく子さん。ホームドラマの母とも称される石井さんが、〝家族のつながりの中心点〟と考える食卓について話をうかがった。

写真＝大槻純一
取材・文＝宇治有美子

いしい ふくこ
1926年生まれ。50年に日本電建宣伝部入社。61年にTBSに引き抜きを受け入社。テレビプロデューサーとして「肝っ玉かあさん」「ありがとう」など多数のホームドラマをヒットさせる。脚本家の橋田壽賀子氏とコンビを組む「渡る世間は鬼ばかり」は20年にも及ぶ長寿番組となった。著書に『お蔭さまで』（世界文化社）、『ありがとう　またね…』（廣済堂出版）など。

Fukuko Ishii

2011年、惜しまれながらシリーズの幕を下ろした人気ドラマ『渡る世間は鬼ばかり』が、2012年9月に2週連続のスペシャルドラマとして復活し、大きな反響を呼んだ。ドラマが復活したのはシリーズ終了後、視聴者から続編への強いリクエストが数多く寄せられたからだという。

大吉、節子夫婦と5人の娘からなる岡倉家を中心にして物語が紡がれる、ホームドラマ『渡る世間は鬼ばかり』の誕生は1990年。娘たちの嫁ぎ先での姑や小姑との確執、夫婦の離婚危機、子どもの受験戦争といったさまざまな悩みやトラブルを抱える日常と、そんな娘たちを心配しながら見守る父と母の愛情を描くストーリーは、多くの人々の共感を呼び、お茶の間で絶大な人気を博した。

22年間で、10シリーズ。ホームドラマとしては異例の金字塔を打ち立てたこのドラマで、家族が時にぶつかり合い、また時に喜びを分かち合う喜怒哀楽の共有の場として重要な役割を担ってきたのが、家族が囲む食卓だ。●

大人気ホームドラマの中心にはいつも食卓シーンがあった

――石井さんのプロデュースするドラマでは、家庭を取り巻く問題が、登場する各家族を通して描かれています。これらのテーマを取り上げ、メッセージを発信するためにはどのような工夫があるのでしょうか。

石井　私が作るドラマの中心にはいつも食卓があります。それは、食卓が家族のつながりを深めるために、とても大切な役割を果たす場所だと考えるからです。食卓を囲み、同じものを食べるということは、家族の絆が深まっていくということではないでしょうか。

ドラマのなかでも、やはり食卓の存在を重要視しています。私はこれまで、家の中で起こるさまざまなサスペンスを描こうとドラマ作りをしてきましたが、家族の集まる場所がなければ、おのおのが抱える問題を皆で話す機会が作れません。

悩みや愚痴、うれしかった出来事まで、食卓に家族がそれぞれテーマを持ち寄って、互いの思いを吐露し合う。食卓はいわば、〝家族のつながりの中心点〟です。これは、ドラマのなかだけに限らず、どの家族にもいえるのではないでしょうか。

ともに食事する食卓での時間が家族のつながりを深める

――家族がそろって食卓を囲むことが、大切なのですね。

石井　毎朝、「おはようございます」と挨拶を交わしながら家族全員が食卓につく。互いの顔色を見るだけで、「今日は元気がないけれど、何か悩みがあるのかな」「顔色が悪いけれど、具合が悪いのかな」といったことにおのずと気付きます。

また、ダイニングにいながら、母親が料理をする姿を見ていると、包丁を持つ姿勢や野菜を刻むリズムなどから、母親の体の変化に気付くこともできます。家族が互いのことを思いやる気持ちは、そうした日々の積み重ねから生まれるのではないかと思うのです。

――食卓に集うことが、家族の絆を強くすると？

石井　ええ、そう思います。ドラマの撮影でも、食事をするシーンがあると空気がやわらぎますが、一緒にものを食べるという行為は、相手との距離を縮める作用があると思うんです。食べながら話していると、不思議と相手の気持ちが分かる気がしませんか？

私は、俳優さんに手作りのおにぎりを持っていくんですよ。出演者は休憩時間が限られていますが、おにぎりなら手軽に食べてもらえる。作るのは手間になりませんし、現場の雰囲気も和み皆元気になりますからね。

『渡る世間は鬼ばかり』では、食卓を囲む意義を描いた象徴的なシーンがあります。長山藍子さん扮する岡倉家の長女・弥生の嫁ぎ先、野田家には、実の息子と離婚した義娘やその子どもなどが暮らし、全く血のつながりのない人々が一緒に食事をとっているのです。

女性たちが順番に当番になって料理を作り、食事の時間には皆が一堂に集まってくる。そんな野田家のダイニングは、昔ながらの大家族を思わせる空間です。疑似家族が、食卓を囲んで同じものを食べるうちに、だんだん一つの家族になっていく様子から、家族が食

石井ふく子さんの代表作である、橋田壽賀子ドラマ『渡る世間は鬼ばかり』。1990年のスタートから22年にわたり放送された。2012年9月に2週連続の2時間ドラマとしてお茶の間に帰ってきた。画像提供：TBS（2012年9月放映分）

『渡る世間は鬼ばかり』の食卓シーン

時代の変化に伴い食卓の彩りは変化したが、変わらず描かれるのは、父親の叱咤激励、子どもの成長など「家族の強い愛情」だ。

卓を囲む意義深さを感じとっていただけるのではないでしょうか。

食卓の在り方の変化が家族関係も希薄にしている

――現代は、夕食はもとより、朝食の時間にも家族が集まることのない家庭が増えています。時とともに、食卓の在り方はどのように変化してきたと思われますか？

石井　『ただいま11人』（1964年～）『肝っ玉かあさん』（1968年～）といった作品に携わっていた頃と比べると、変わりましたね。当時のドラマでは、朝夕問わず、食事の時間には、大黒柱の父親を中心にして、母親、祖父母、子どもたちが集う姿があったものです。ところが昨今は、大家族が一堂に集うようなシーンは、珍しくなりました。

父親は仕事で忙しくて帰ってこられない。食事も一緒にとる日がほとんどないのが現状です。そんな日が続くと、食卓に父親の姿がないことが日常になっていきますよね。家族のなかに父親の居場所がないといわれるようになって久しいですが、これは家族とともに食事をする機会が少なくなり、父親と家族のつながりが希薄になってしまったことも一因のような気がしています。

ちゃぶ台からテーブルへ食卓空間も変遷してきた

――30～40年前から今日まで、ドラマのなかの食卓には、どのような変化がありましたか？

石井　昭和から平成へ時代が移り変わるとともに、食卓のある空間自体にも変遷が見られました。最大の変化といえば、生活様式が和から洋へ、また食卓のある部屋が畳の間から洋間になったことでしょう。今は、多くの家庭でフローリングのフロアにダイニングテーブルが置かれていますよね。

私がドラマを作るときには、今も必ず食卓のシーンを入れていますが、日常の食事はやはりダイニングテーブルを使っています。今回の『渡る世間は鬼ばかり』のスペシャルドラマでは岡倉家の家族が集まって食事をするシーンがありましたが、こちらは特別な日ということで、畳の間で座卓を囲んだ。昭和の中頃までは畳の部屋でちゃぶ台を囲みました。しかしこの食事スタイルは、現代では非日常へと変化しているということでしょうね。

――食卓を彩る小道具にも、変化があるのでしょうか？

石井　もちろん、そうです。台所用品には、とくに時代が表れるものだと思います。新しい台所用品を知っておくために、私は意識してデパートの家庭用品売り場を歩くようにしているんです。最近では、例えば電子レンジだけで料理ができる調理道具など、どんどん便利になっていますよね。

便利な調理道具を使うか、使わないか。母親はいやだといい、若い娘は新しいものは便利だから使いたいという。そうした何気ないやりとりがドラマのワンシーンになるんですよ。

――調理グッズだけでなく、惣菜を買って並べるなど、食事の仕方も随分変わりました。

石井　子どもは、自分の母親が作ったものは一番おいしいと思って育つものではないでしょうか。その思い出が親子両方に幸せな思い出としてインプットされていくわけです。

デパ地下の食品が充実し、いかにして簡単に食事をとろうか、という考え方が、現代の風潮になっていますよね。誰かのために料理をしてあげたいという心がなくなっているのをとても重く受け止めています。

ドラマの制作現場では、プロの料理人に指導をいただきながら食事のシーンを描いています。素材の選定から調理方法、盛り付けに至るまで、作り手の心を丁寧に映し出したいのです。

機械化が進んで、物が豊かになったけれど、それとは逆に心は貧しくなっていく。文化と文明が逆行しているのを感じます。その結果、家族のバランスも崩れてきている。ドラマのなかでそうした問題を提起していきたいという気持ちもありますね。

ドラマを通じて家族の関係を育むためのヒントを提示したい

――今後ドラマを通じて、どのような食卓の在り方をメッセージとして伝えていきたいと思われますか？

石井　理想を言えば、朝だけと言わず、夜も家族が食卓に集まって時間を過ごしてほしい。個々の社会ができていますから、なかなか難しいでしょうが、年に数回だけでも、誕生日やお祝いの会などに食卓を囲む機会を作ることは大切だと思います。そこで子どもの悩みを一緒に考えることで親も勉強し、成長していくものではないでしょうか。ぶつかり合いや、言い合いを恐れず、キャッチボールをすることを大切にしてほしい。ドラマのなかでも、食卓のシーンを大切にすることで、皆さんの生活の指標となれるよう、ドラマ作りを続けてまいります。

Fukuko Ishii

「家族は、食卓に集い語り合うことで互いに成長する。ドラマでも、そのような日常を大切に描いています」

PRESENT ＊石井ふく子さんの著書『ありがとう　またね…』を抽選で10名様にプレゼント。詳しくは21ページをご覧ください。